

乳幼児をもつ共働き夫婦の QOL とスピルオーバーの関係

岩崎孝子

国立看護大学校；〒204-8575 東京都清瀬市梅園 1-2-1
国立国際医療センター
iwasaki@adm.ncn.ac.jp

Relationships between QOL and Work-family Spillover of Dual-earner Couples with Young Children

Takako Iwasaki

National College of Nursing, Japan ; 1-2-1 Umezono, Kiyose-shi, Tokyo, 〒204-8575, Japan
International Medical Center of Japan

【Abstract】 The purpose of this study was to examine the relationship between QOL and work-family spillover among dual-earner couples with young children and differences of them. The subjects were 123 dual-earner couples with young children. Data were collected by a questionnaire comprising WHOQOL26 and work-family spillover scale. The results were as follows: The total QOL scores did not differ significantly by gender. The men's domain of 'physical health' and 'psychological health' was significantly higher than women's, whereas the women's 'social relationships' was significantly higher than men's. There are few correlations between men and women. The QOL of men was determined on the basis of 'positive spillover from good relationships between work and family' and 'negative spillover from work to family'. The QOL of women was predicted by 'positive spillover from benefits of roles' as well as 'good relationships between work and family' and 'negative spillover from family to work'. These findings suggest that it is important to support dual-earner couples with young children reducing negative spillover between work and family and promoting positive spillover between work and family.

【Keywords】 多重役割 multiple roles, 乳幼児をもつ共働き夫婦 dual-earner couples with young children, QOL, スピルオーバー work-family spillover

．緒言

価値観の変化や男女共同参画社会の推奨などにより、乳幼児をもつ共働き夫婦は増加している(厚生労働省, 2005)。このような夫婦は社会における仕事役割と子育てを含む家庭役割の両者を期待されている。「仕事と子育ての両立支援」は少子化にも伴い、次世代育成支援対策推進法案でも主要な指針として取り込まれている。しかしながら、男性の長時間労働や性別分業観が根強く残る社会背景などから、依然男性は仕事役割が重視され、家庭役割の多くは女性に負荷されている状況にあり、乳幼児をもつ共働き夫婦を取り巻く環境は十分整っているとは言い難い(内閣府男女共同参画局, 2006)。

仕事役割や家庭役割など複数の役割をもつこと、すなわち多重役割への従事において、仕事と家庭の関係は一種のストレスラーとしてとらえることができる(MacEwen & Baring, 1994)。この領域での知見は、主に母親を対象に役

割葛藤や、その影響としての抑うつなどネガティブな側面をとらえたものが多いことが指摘されている(小泉, 1997; 福丸, 2003)。しかし、多重役割を担うことは必ずしもネガティブな影響ばかりを従事者にもたらすのではない。ポジティブな影響をもたらすという知見も海外では蓄積されてきている(Barnett & Hyde, 2001)。しかし役割は社会や文化の規範の文脈のなかで形成されることを考えると、日本における社会的・文化的状況を考慮する必要がある(小泉, 1997)。日本における多重役割を担う人々に関する知見は、たとえば多重役割の従事が、乳幼児をもつ共働き夫婦において抑うつ(福丸, 2000a, 2001)や母親の子育てストレスなど(小泉, 菅原, 北村, 2001)に及ぼす影響や、役割葛藤が抑うつや満足感に与える影響を検討した研究(金井, 2002)などがあるが、海外に比べて実証的研究は少ない(金井, 2002)。多重役割を同様に担っていてもその認知には個人差があり、太田(2000)が指摘するように、役割間の関係認知が心身への影響の重要な規定因になると考えられる。したがって、乳幼児をもつ共働き夫婦の適切な支援を

行うには、多重役割の関係認知の影響を多角的にとらえ、包括的な健康に及ぼす影響をみていく必要がある。しかし、これらの人々の包括的な健康の指標である QOL に関する知見や、多重役割の関係認知が QOL に及ぼす影響を明らかにした知見はほとんど得られていない。これらを妻からの視点からだけでなく、夫と妻双方の相違を検討することは、看護上意義があると考えられる。

そこで本研究の目的は、多重役割を担う乳幼児をもつ共働き夫婦の QOL の相違を明らかにすること、ならびに多重役割間に関する認知、すなわちスピルオーバーと QOL の関係を明らかにし、その夫婦間の相違を検討することとした。これらの検討によって、乳幼児をもつ共働き夫婦の QOL 向上への看護支援のための基礎資料が提示できるのではないかと考えた。

・用語の操作的定義と概念枠組み

1. 用語の操作的定義

多重役割：仕事（有給の職業に従事すること）と家庭役割（配偶者役割、親役割、家事役割）に従事する状態とした。

スピルオーバー：仕事役割と家庭役割の関係性に関するモデルの一つであり、一方の役割における状況や経験が、他方の役割における状況や経験に影響を及ぼすことと定義される（Crouter, 1984；小泉, 1997；福丸, 2000a）。スピルオーバーは仕事役割から家庭役割、家庭役割から仕事役割の双方向性をもつ。どちらの方向性においても、役割間のネガティブな関係を想定したネガティブスピルオーバー（例；仕事が忙しくて家族とゆっくり過ごす時間がない）と、ポジティブな関係を想定したポジティブスピルオーバー（例；仕事がうまくいっているので家にいるときも気分がいい）がある。本研究では、仕事役割と家庭役割間に対してネガティブな認知評価の場合をネガティブスピルオーバー、ポジティブな認知評価の場合をポジティブスピルオーバーとした。

QOL：WHO の定義に基づき、個人が生活のなかで自分自身の人生の状況に対して感じる満足感・不満足感とした。

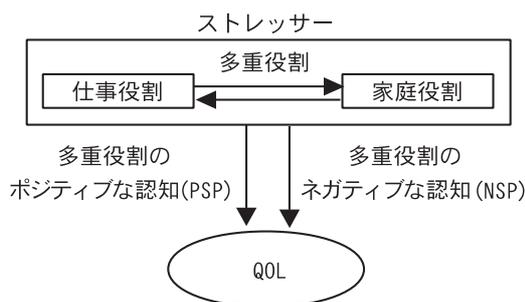


図 1 本研究の概念枠組み

2. 概念枠組み

概念枠組みを図 1 に示す。多重役割の従事をストレスナーとし、仕事役割と家庭役割の関係認知であるスピルオーバーが QOL に及ぼす影響を検討する。

・方法

1. 研究デザイン

本研究は質問紙法を用いた QOL とスピルオーバーの関連検証型研究である。

2. 調査対象および調査の実施

乳幼児をもつ共働き夫婦の夫と妻を対象とした。研究趣旨に同意の得られた関西圏 4 か所の保育園に通う乳幼児を養育する共働き夫婦に調査を行った。対象者に保育園を通し、紙面に記載した調査趣旨と無記名式質問紙を配布、自宅で夫婦別々に記入後、同封の返信用封筒にて郵送で回収した。調査期間は 2003 年 6～7 月である。

3. 調査内容

質問紙の構成は以下に示す WHOQOL26 尺度、改訂スピルオーバー尺度、対象者の背景要因に関する情報からなる。

QOL の測定には、WHOQOL26 尺度を用いた。これは異文化間の QOL の差異を調査する目的で WHO によって開発され、日本語版は田崎、中根（1997）によって邦訳、標準化されている。身体的領域、心理的領域、社会的関係、環境の 4 領域 24 項目に、全体としての QOL を問う 2 項目を加えた 26 項目から構成され、5 段階のリッカート尺度で評価する（表 1）。得点が高いほど、QOL を高く認知していることを示す。

スピルオーバーの測定には仕事役割と家庭役割間関係を測定する福丸のスピルオーバー尺度（2000a）を著者の許可を得、改訂したものを用いた。改訂尺度は福丸の尺度の 12 項目を引用、新たな 6 項目を加えた 18 項目、5 段階リッカート尺度である。改訂箇所はポジティブな項目、ならびに予備調査で得られた知見などから新たな項目を加えたことである。因子分析（最尤法プロマックス回転）の結果、仕事役割から家庭役割へのネガティブスピルオーバー（以下、仕事役割から家庭役割への NSP）、家庭役割から仕事役割へのネガティブスピルオーバー（以下、家庭役割から仕事役割への NSP）、役割経験の恩恵によるポジティブスピルオーバー（以下、役割経験の恩恵による PSP）、役割の良い状態からのポジティブスピルオーバー（以下、役割の良い状態からの PSP）の 4 因子構造で、累積寄与率は 51.6% だった。NSP、PSP は独立に扱い、下位尺度で検討する。得点が高いほど、それぞれの NSP、PSP が高いことを示す（表 2）。改訂スピルオーバー尺度は内的一貫性と構成概念妥当性が支

表 1 WHOQOL26 尺度の構成

尺度名	項目数	領域	下位項目
WHOQOL26 尺度 (WHO,1997; 田崎, 中根訳) 26 項目 α 信頼性係数 = .873	7	(1) 身体的領域	日常生活動作, 医薬品と医療への依存, 活力と疲労, 移動能力, 痛みと不快, 睡眠と休養, 仕事の能力
	6	(2) 心理的領域	ボディイメージ, 否定的感情, 肯定的感情, 自己評価, 精神性 / 宗教 / 信条, 思考 / 学習 / 記憶 / 集中
	3	(3) 社会的関係	人間関係, 社会的支援, 性的活動
	8	(4) 環境	金銭関係, 自由 / 安全と治安, 健康と社会的ケア, 居住環境, 新しい情報と技術の獲得の機会, 余暇活動の参加と機会, 生活圏の環境, 交通手段
	2	(5) 全体	生活の質の評価, 健康状態への満足

表 2 改訂スピルオーバー尺度の構成

尺度名	項目数	α 信頼性係数	尺度の因子構造; 項目例
改訂スピルオーバー尺度	5	.826	(1) 仕事役割から家庭役割への NSP ; 仕事をしているので子どもの世話がいきとどかない, 仕事のために家事がおろそかになる
	4	.737	(2) 家庭役割から仕事役割への NSP ; 家事や育児のために仕事量を抑えなければならない, 家事や育児のために仕事役割を思うように果たせない
	5	.820	(3) 役割経験の恩恵による PSP ; 仕事での経験が家庭でも生かされる, 家庭での経験が仕事でも生かされる
	4	.756	(4) 役割の良い状態からの PSP ; 仕事があまくいっているので家にいるときも気分がいい, 家庭生活があまくいっているので仕事にも張り合いがでる

持され, 福丸のスピルオーバー尺度との併存妥当性は, 各下位尺度において $r = .81 \sim .933$ であった。

・ 結 果

4. 分析方法

分析は SPSS10.1 for Windows を用い, 統計的解析を実施した。スピルオーバーと QOL の関係の検討には Pearson の相関係数, 重回帰分析を行った。夫婦間の検討には, 対応のある t 検定を用いた。QOL と背景要因との検討は Kruskal Wallis 検定, Mann-Whitney 検定を用いた。有意水準は危険率 5%未満とした。

5. 倫理的配慮

神戸大学医学部倫理委員会承認後, 対象者に文書で研究目的と方法, 回答は無記名であり, 参加は自由意思であること, 結果は研究目的以外に使用しないことなどの説明を行い, 同意した場合のみ回答の返送を依頼した。

1. 対象者の背景

質問紙の回収数は妻 211 名 (回収率 41.1%), 夫 137 名 (回収率 28.2%) であった。そのうち夫婦ともデータのそろった 123 組 246 名を分析対象とした。

平均年齢は夫 35.7 ± 6.0 歳, 妻は 33.8 ± 4.5 歳, 子の人数平均 1.7 ± 0.7 人, 末子平均年齢 2.33 ± 1.7 歳, 核家族が 87% であった。夫の雇用形態はフルタイム就業が 90.2%, 労働時間は 50 時間以上が 55.3%, 妻の雇用形態はフルタイム就業 65.9%, パートタイム就業 30.9%, 労働時間は 40 ~ 49 時間が最も多く, 42.3% を占めた。配偶者以外の家事・育児サポートありは夫 31.7%, 妻 37.4% であった。

2. QOL およびスピルオーバー得点

1) QOL 得点

乳幼児をもつ共働き夫婦の QOL 得点と夫婦間の比較を表 3 に示す。総得点平均値は夫 $3.23 \pm .42$, 妻 $3.14 \pm .42$ で,

表3 乳幼児をもつ共働き夫婦の QOL 得点 (n = 123)

		夫 項目平均値±標準偏差	妻 項目平均値±標準偏差
領域	身体的領域	3.41 ± .51**	3.23 ± .52
	心理的領域	3.38 ± .53*	3.22 ± .53
	社会的関係	3.11 ± .60	3.25 ± .51*
	環境	3.02 ± .52	3.00 ± .51
	全体	3.10 ± .68	3.09 ± .66
総得点		3.23 ± .42	3.14 ± .42

対応のある t 検定 *p<.05, **p<.01

表4 夫および妻における QOL 項目別得点の下位 5 項目 (n = 123)

夫		妻	
下位項目 (領域)	平均値±標準偏差	下位項目 (領域)	平均値±標準偏差
余暇活動の参加と機会 (環境)	2.59 ± .91	余暇活動の参加と機会 (環境)	2.55 ± .91
睡眠と休養 (身体的領域)	2.63 ± .99	睡眠と休養 (身体的領域)	2.67 ± 1.04
金銭関係 (環境)	2.76 ± .90	健康と社会的ケア (環境)	2.67 ± .90
健康と社会的ケア (環境)	2.80 ± .79	日常生活動作 (身体的領域)	2.81 ± .93
性的活動 (社会的関係)	2.92 ± .76	交通手段 (環境)	2.85 ± 1.10

中程度を示す 3 をやや上回り、夫婦間に有意差はなかった。領域得点も夫婦ともすべて 3 以上であったが、「身体的領域」「心理的領域」がやや高めで、「環境」領域がやや低めだった。夫婦間の差異は「身体的領域」「心理的領域」で夫が妻より、「社会的関係」領域で妻が夫より有意に高かった。QOL が低い項目は、夫婦とも「環境」領域の「余暇活動の参加と機会」「健康と社会的ケア：利用のしやすさと質」、身体的領域の「睡眠と休養」で、さらに夫は「環境」領域の「金銭関係」、妻は「身体的領域」の「日常生活動作」だった(表4)。QOL 得点の夫と妻の相関は「環境」領域のみ弱い相関 ($r = .35, p < .01$) があった。

QOL 総得点において、背景要因による有意差が認められたものは、夫では子の人数が 2 人以上の群が 1 人の群より、週あたりの労働時間時間が 50 時間以上の群が 49 時間以下の群より有意に QOL 総得点が低かった (それぞれ $p < .05$)。妻では、労働時間が 34 時間以下の群が 40 ~ 49 時間の群より有意に QOL 総得点が低かった ($p < .05$)。夫の労働時間による妻の QOL の差異は認められなかった。

2) スピルオーバー得点

スピルオーバー得点と夫婦間の比較を表5に示す。得点は夫婦とも中程度を示す 3 前後であるが、「役割経験の恩恵による PSP」が最も高く、「家庭役割から仕事役割への NSP」

が最も低かった。特に夫の「家庭役割から仕事役割への NSP」が $2.11 \pm .83$ と低い値を示した。夫婦間の比較では、「家庭役割から仕事役割への NSP」「役割経験の恩恵による PSP」が、有意に妻が高かった。夫と妻の相関は、下位尺度すべてで有意な相関はみられなかった。

3. QOL 得点とスピルオーバー得点との関係

QOL 得点とスピルオーバー得点との関係は、夫婦ともに QOL 総得点および領域得点のほとんどがスピルオーバー下位尺度の「仕事役割から家庭役割への NSP」と有意な負の相関、また、すべてが「役割経験の恩恵による PSP」「役割の良い状態からの PSP」と有意な正の相関を示し、特に「役割の良い状態からの PSP」では中程度以上の相関が多く認められた(表6)。

夫婦間の相違をみると、「仕事役割から家庭役割への NSP」との負の相関はすべて妻より夫が高く、「役割経験の恩恵による PSP」「役割の良い状態からの PSP」との正の相関は夫より妻のほうが高い傾向が認められた。また「家庭役割から仕事役割への NSP」は、夫は総得点およびすべての領域で相関はなかったが、妻においては総得点ならびに「身体的領域」、「環境」領域、「全体」で有意な弱い負の相関が認められた。

表5 乳幼児をもつ共働き夫婦のスピルオーバー下位尺度得点 (n = 123)

スピルオーバー下位尺度	夫	妻
	平均値±標準偏差	平均値±標準偏差
仕事役割から家庭役割へのNSP	2.96 ± .99	3.14 ± .79
家庭役割から仕事役割へのNSP	2.11 ± .83	2.88 ± .87***
役割経験の恩恵によるPSP	3.11 ± .75	3.51 ± .69***
役割の良い状態からのPSP	3.06 ± .68	3.13 ± .72

対応のある t 検定 ***p < .001

表6 QOL 得点とスピルオーバー下位尺度得点の相関関係 (n = 123)

QOL 総得点	性別	仕事役割から家庭役割へのNSP	家庭役割から仕事役割へのNSP	役割経験の恩恵によるPSP	役割の良い状態からのPSP
		へのNSP	へのNSP	PSP	PSP
QOL 総得点	夫	-.422***	—	.312**	.553***
	妻	-.321***	-.215*	.463***	.652***
身体的領域	夫	-.416***	—	.225*	.467***
	妻	-.362***	-.267**	.254**	.483***
心理的領域	夫	-.291**	—	.308**	.488***
	妻	-.329***	—	.487***	.641***
社会的関係	夫	-.209*	—	.342***	.459***
	妻	—	—	.371***	.376***
環境	夫	-.326***	—	.209*	.393***
	妻	—	-.210*	.368***	.528***
全体	夫	-.358***	—	.203*	.352***
	妻	-.252**	-.221*	.352***	.506***

注) 有意な相関がみられたもののみ示す

Pearson の相関係数 *p < .05, **p < .01, ***p < .001

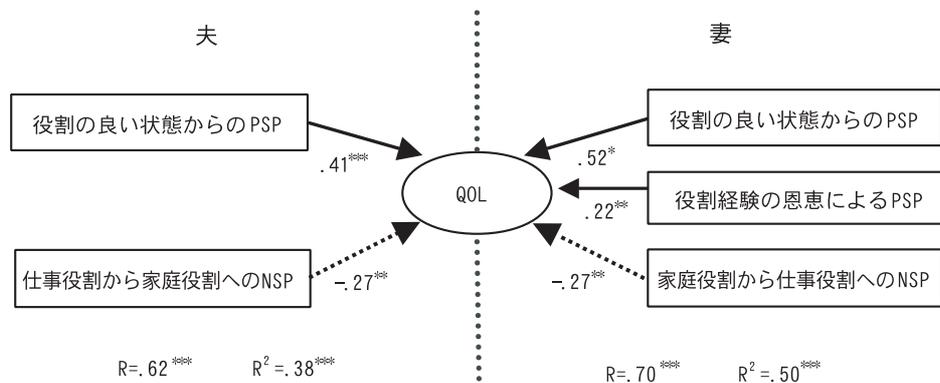


図2 重回帰分析 (ステップワイズ法) による QOL への予測因子 (n = 123)

p < .01, *p < .001

4. QOL へのスピルオーバーの影響

QOL へのスピルオーバーの影響を夫婦別に重回帰分析 (ステップワイズ法) で検討した (図 2)。基準変数は QOL 総得点, 説明変数は QOL と有意な相関 (r > .20 以上) のあるスピルオーバー下位尺度得点とした。その結果, 夫では「役割の良い状態からの PSP」が QOL を高め, 一方「仕事役割から家庭役割への NSP」が QOL を低めることに寄与していた。重相関係数は R = .62, 決定係数は R² = .38 で,

これらの 2 因子で夫の QOL の分散の 38% が説明された。妻では「役割の良い状態からの PSP」「役割経験の恩恵による PSP」が QOL を高め, 「家庭役割から仕事役割への NSP」が QOL を低めることに寄与していた。重相関係数は R = .70, 決定係数は R² = .50 で, これらの 2 因子で妻の QOL の分散の 50% が説明された。夫婦とも「役割の良い状態からの PSP」の標準偏回帰係数が高かった。

・ 考 察

本研究では、乳幼児をもつ共働き夫婦の包括的健康の指標としての QOL, および多重役割間の関係認知(スピルオーバー)と QOL の関係の夫婦間の相違について検討を行い、以下の知見を得た。

1. 乳幼児をもつ共働き夫婦の QOL の相違

乳幼児をもつ共働き夫婦の QOL の夫婦間の相違は、総得点では有意差はなかったが、「身体的領域」「心理的領域」で夫が、「社会的関係」で妻が有意に高かった。QOL 総得点、領域別得点とも中程度を示す 3 以上で、夫婦間の関連は「環境」領域のみ認められた。ここでは QOL の低かった下位項目に関する夫婦間の相違を中心に検討を行う。

QOL が低い項目において夫婦間で相違が認められたのは、夫は「金銭関係(環境)」, 妻は「日常生活動作(身体的領域)」であった。夫の経済状況に対する QOL が低かったのは、共働きによる経済的メリットを感じている(福丸, 2000b) 一方、夫が家計を支えるという性別分業感や、妻への両立負担に対する気兼ねなどが影響しているのではないかと推測される。妻の「日常生活動作」が低かったのは、限られた時間のなかで役割従事を行わなければならない、両立への調節などの毎日の活動能力の満足度が低く認知されたと考えられる。夫婦とも QOL が低い項目は、「余暇活動の参加と機会(環境)」「健康と社会的ケア: 利用のしやすさと質(環境)」「睡眠と休養(身体的領域)」であった。夫は仕事役割負荷により、妻は仕事役割と家庭役割負荷により、睡眠や余暇を楽しむ時間が十分とれず、身体的疲労やリフレッシュができていく状況が、QOL 低下の要因であることが考えられる。次世代育成支援推進法案は、男性を含めた働き方の見直しなどが含まれている。これらの施策の整備、推進とともに、個人に対する時間配分や役割分担の調整、両立サポート資源の情報提供・調整などの支援が必要である。また「健康と社会的ケア: 利用のしやすさと質」の項目も低かった。診療時間内の受診や、子の介護休暇の利用が難しいことが推測される。伊藤、瀧川、玉田(2000)によると、子が病気するとき、母親が欠勤して看護を行う場合がほとんどであり、子の病気を理由に仕事を欠勤することに心理的負担に感じていた。妻だけでなく夫も子の介護休暇を取りやすい環境整備、病児保育の充実、医療機関の外来受診時間検討や情報提供なども必要とされるであろう。

背景要因による夫婦別の QOL の比較では、夫は週あたりの労働時間 50 時間以上の夫は有意に QOL が低く、妻は労働時間が 40 ~ 49 時間の群が有意に 34 時間以下の群より QOL が高かった。夫婦間の家事・育児共有の現状調査(家事プロジェクト, 2003)において、妻が短時間労働の場合、

夫の家事・育児共有度は低く、妻が専業主婦家庭と差がなく、妻が常勤で働いている場合、家事・育児共有度は上がるという結果や、フルタイムの父母よりパートタイムの母親の子育てのストレスが高いという知見(初塚, 石田, 1996)もあり、妻の短時間労働のみが仕事役割と家庭役割負荷を軽減するとはいえないことが示唆される。今後、短時間労働に従事する妻の QOL に及ぼす要因に関しても、さらなる検討が必要と考える。

2. QOL とスピルオーバーの関係

QOL 得点とスピルオーバー得点との関係は、夫婦ともに QOL 総得点および領域得点のほとんどが「仕事役割から家庭役割への NSP」と有意な負の相関、またすべてが「役割経験の恩恵による PSP」「役割の良い状態からの PSP」と有意な正の相関を示した。特に「役割の良い状態からの PSP」では中程度以上の相関が多く認められた。これは Grzywacz(2000)も指摘するように、ネガティブスピルオーバーの増加はストレスと認知される一方、ポジティブスピルオーバーは心理・社会的な満足度を高め、QOL の資源となっていると考えられる。Neuman と Fawcett(2002)は、ストレスサーがシステムにポジティブまたはネガティブな影響を与える違いはクライアントの認知によると述べている。本研究でもこれらの認知の違いにより、QOL に影響を与えることが示された。つまり、仕事役割と家庭役割間の影響のネガティブな認知の軽減とポジティブな認知を高めることが、乳幼児をもつ共働き夫婦の QOL 低下の 1 次予防としての支援に有用なことが示唆された。

3. QOL とスピルオーバーの関係の夫婦間の相違

QOL とスピルオーバーの関係を夫婦別に検討する。「役割の良い状態の PSP」が QOL の向上に寄与していることは夫婦とも同様であった。これに加えて、夫は「仕事役割から家庭役割への NSP」が QOL の低下に寄与しており、妻は「家庭役割から仕事役割への NSP」が QOL の低下に、「役割経験の恩恵による PSP」が QOL を高めることに寄与しているという違いが認められた。

夫は仕事役割の大きな負荷がストレスと認知され、特に身体的領域の QOL 低下に影響を及ぼしていることが推測される。仕事役割から家庭役割へのネガティブスピルオーバーの先行要因として、小泉他(2003)や福丸(2001)の知見より労働時間や仕事ストレス、仕事役割の質が影響することが明らかになっている。これらの先行要因の軽減を図る職場環境整備と調整が必要であると考えられる。

妻は「家庭役割から仕事役割への NSP」が QOL 低下に寄与していた。夫のこの得点が著しく低かったことより、夫はネガティブスピルオーバーを認知しているほど家庭役割を担っていないことが考えられる。妻の得点は中程度以下

であったが、父親より母親のほうが家庭役割での負担が仕事役割に影響すると感じていること(福丸, 2003)や、時間的制約がQOLを低下する要因になると考えられる。QOLの向上には「役割経験の恩恵によるPSP」が寄与していたのは、山崎(1997)が育児期の女性は「母親としての自己」と、社会(職場)で必要とされる「母親として以外の自己」の2つの充実を望んでいると述べているように、日本のこの世代の女性が社会のなかでの自己実現を重視していることを反映しているためだろう。仕事役割と家庭役割を担うことによる相互の経験が有益であることを周囲の人々が肯定し、フィードバックすることが、妻自身の認知力を高め、妻のQOL向上につながるのではないかと考える。夫婦ともポジティブスピルオーバーの標準偏回帰係数が高かったことより、QOL向上にはネガティブスピルオーバーの軽減だけでなく、ポジティブスピルオーバーを高める必要性が示唆された。また、QOLに夫婦間の相関が環境領域以外ほとんどみられなかったことより、乳幼児をもつ共働き夫婦のQOL向上の支援のためには、QOLとスピルオーバーの関係におけるこれらの夫婦の相違を考慮した夫と妻それぞれへの支援の必要性が示唆された。

本研究の限界として、夫の回収率が低く、乳幼児をもつ共働きの夫全体が反映されているのか疑問が残る。今後の課題として、共働き家族の支援に資するためには、家族のQOLなど家族の枠組みを含めた視点と、またストレスの調節能力や、スピルオーバーの先行要因、これらがQOLに及ぼす直接的影響なども検討する必要がある。

・ 結 論

- ①乳幼児をもつ共働き夫婦のQOLは、総得点、領域得点とも中程度を若干上回っていたが、夫婦間の関連は「環境」領域以外はほとんど認められなかった。QOLが低い項目は、夫婦とも「環境」領域の「余暇活動の参加と機会」「健康と社会的ケア:利用のしやすさと質」,「身体的領域」の「睡眠と休養」で、さらに夫は「環境」領域の「金銭関係」、妻は「身体的領域」の「日常生活動作」だった。
 - ②QOLとスピルオーバーの関係の夫婦間の相違は、夫は「役割の良い状態からのポジティブスピルオーバー」がQOLを高め、「仕事役割から家庭役割へのネガティブスピルオーバー」がQOLを低めていた。妻は「役割の良い状態からのポジティブスピルオーバー」「役割経験の恩恵によるポジティブスピルオーバー」がQOLを高め、「家庭役割から仕事役割へのネガティブスピルオーバー」がQOLを低めることに寄与していた。
- 以上の結果より、乳幼児をもつ共働き夫婦のQOL向上には、夫婦ともネガティブスピルオーバーの軽減だけでなく、ポジティブスピルオーバーを高めること、およびQOLとス

ピルオーバーの関係におけるこれらの夫婦間の相違を考慮した夫と妻それぞれへの支援の必要性が示唆された。

謝 辞

ご多忙中、質問紙調査にご協力くださいました対象者の皆様、ならびに保育園関係者の皆様に心より感謝申し上げます。また、本研究をご指導いただきました国際医療福祉大学村田恵子教授、尺度の改訂と使用を快くお許しいただきました Cincinnati Children's Hospital Medical Center 福丸由佳先生に心より御礼申し上げます。

本研究は2004年神戸大学大学院医学系研究科博士前期課程の修士論文の一部を加筆・修正したものであり、第11回家族看護学会学術集会で発表した。

文 献

- Barnett, R.C., & Hyde, J.S. (2001). Women, men, work, and family: An Expansionist Theory. *American Psychologist*, 56(10), 781-796.
- Crouter, A.C. (1984). Spillover from family to work: The neglect side of the work-family interface. *Human Relations*, 37, 425-442.
- 福丸由佳 (2000a). 共働き夫婦世帯における多重役割と抑うつとの関連. 家族心理学研究, 14 (2), 151-162.
- 福丸由佳 (2000b). 乳幼児を持つ親の多重役割と抑うつ度との関連—父親を中心としたインタビューによる調査結果から. お茶の水女子大学大学院人間文化研究所論叢, 3, 133-143.
- 福丸由佳 (2001). 乳幼児を持つ父母における多重役割と抑うつ度との関連を示すモデルの検討. お茶の水女子大学大学院人間文化研究所論叢, 4, 11-21.
- 福丸由佳 (2003). 乳幼児をもつ父母における仕事と家庭の多重役割. 12-24, 65-95, 風間書房, 東京.
- Grzywacz, J.G. (2000). Work-family spillover and health during midlife: Is managing conflict everything. *American Journal of Health Promotion*, 14(4), 236-243 .
- 初塚真喜子, 石田雅人 (1996). 子育てにおける母親と父親のストレス比較—母親の就労形態による差異. 大阪教育大学紀要第IV部, 45 (1), 31-42.
- 伊藤智子, 瀧川すみ子, 玉田隆 (2000). 保育所に我が子を預ける保護者への意識調査—子どもの病気と小児医療について. 小児保健研究, 59 (3), 424-431.
- 家事プロジェクト(2003). 男は忙しいから家事できない? 男性の家事・育児を考える Vol.2. 22-25, 「男も女も育児時間を!」連絡会 家事プロジェクト, 東京.
- 金井篤子 (2002). ワーク・ファミリー・コンフリクトの規定因とメンタルヘルスへの影響に関する心理的プ

- ロセスの検討. 産業・組織心理学研究, 15 (2), 107-122.
- 小泉智恵 (1997). 仕事と家庭の多重役割が心理的側面に及ぼす影響・展望. 母子研究, 18, 42-59.
- 小泉智恵, 菅原ますみ, 北村俊則 (2001). 児童を持つ共働き夫婦におけるネガティブ・スピルオーバー: 抑うつ, 夫婦関係, 子育てストレスに及ぼす影響. 精神保健研究, 47, 65-75.
- 小泉智恵, 菅原ますみ, 前川暁子, 北村俊則 (2003). 働く母親における仕事から家庭へのネガティブスピルオーバーが抑うつ傾向に及ぼす影響. 発達心理学研究, 14 (3), 272-283.
- 厚生労働省雇用均等・児童家庭局編 (2005). 女性労働白書—働く女性の実情. 67, 21世紀職業財団, 東京.
- MacEwen, K.E., & Baring, J. (1994). Daily consequences of work interference with family and family interference with work. *Work & Stress*, 8, 244-254 .
- 内閣府男女共同参画局 (2006). 男女共同参画白書 平成18年度. http://gender.go.jp/whitepaper/h18/web/danjyo/html/honpen/chap01_03_01.html.
- Neuman, B., & Fawcett, J. (2002). *The neuman systems model* (4th ed.). New Jersey: Prentice Hall.
- 太田さつき (2000). 多重役割への従事とその結果—研究の現状と今後の方向性. 青山学院大学教育学会紀要, 44, 119-134.
- 田崎美弥子, 中根允文 (1997). WHO-QOL 短縮版—使用手引き. 金子書房, 東京.
- 山崎あけみ (1997). 育児期の家族の中で生活している女性の自己概念—「母親としての自己」・「母親として以外の自己」の分析. 日本看護科学会誌, 17 (4), 1-10.

【要旨】 本研究の目的は、乳幼児をもつ共働き夫婦のQOL, および多重役割（仕事役割と家庭役割）の関係認知（スピルオーバー）とQOLの関係の夫婦間の相違を検討することである。乳幼児をもつ共働き夫婦123組にWHOQOL26, 改訂スピルオーバー尺度から構成された質問紙調査を実施し, 以下の知見を得た。①乳幼児をもつ共働き夫婦のQOLは総得点, 領域得点とも中程度を若干上回っていた。夫婦間の相違は, 総得点では有意差はなかったが, 「身体的領域」「心理的領域」で夫が, 「社会的関係」で妻が有意に高かった。夫と妻の相関は環境のみ弱い正の相関が認められた。②QOLとスピルオーバーの関係の夫婦間の相違は, 夫は役割間の状態に対するポジティブな関係認知がQOLを高め, 仕事役割から家庭役割へのネガティブな関係認知がQOLを低めていた。妻は役割間の状態に対するポジティブな関係認知と役割間経験のポジティブな関係認知がQOLを高め, 家庭役割から仕事役割へのネガティブな関係認知がQOLを低めることに寄与していた。以上の結果を考慮した看護支援の必要性が示唆された。
